

〔研究ノート〕

J・J・マシューズの『夕映え』

—インディアン男性の成長物語—

西村 頼 男

キーワード

合衆国先住民、オクラホマ州、オーセイジ族

目次

- I 略伝
- II オーセイジ族
- III 作品の梗概
- IV インディアン男性の成長物語
- V 作品の評価

I 略伝

ジョン・ジョゼフ・マシューズ（一八九四—一九七九¹）の父親の名前はウイリウム・シャリーリー・マシューズで、フランス人とオーセイジ・インディアン²の血（四分の一）を引く混血であった。母親の名前はユージーニアで、純血インディアンであった。一家は一八七四年に部族と一緒にカンザス州からインディアン准

州に移住した。一家の家は一九〇六年オーセイジ・インディアンに単独土地所有法³が適用されるまで、オーセイジ国の首都であったポーハスカを見下ろす場所にあった。ポーハスカ——後にオクラホマ州オーセイジ郡の中心となる——は当時、開拓の進む西部の町であった。父親ウィリアムはキリスト教の宣教師で聖書をオーセイジ語に翻訳した。また、交易所を営み、後にはその地の最初の銀行を設立して、白人の妻および混血の子供たちに裕福な生活を送らせた。

マシューズは一九一四年に高等学校を卒業後、オクラホマ大学（一八九〇年設立）に入学して、二〇年に地質学専攻の学位を得た。彼は在学中、三年間ほど軍務に服して、最初は騎兵隊、その後、通信関係に従事して航空部隊に配属された。従軍してフランスでアメリカ遠征軍付きの飛行教官になった。彼は大学卒業後、ローズ奨学金³の申し出を拒否したが、その理由は、当時、オーセイジ保留地で見つかった石油採掘から得られる配当金で留学できる見込みがあったからだと思われる。彼はオックスフォード大

学に入學して、一九二三年に自然科学で同大学のマートン・カレッジからB・Aを取得した。オートバイでフランスを放浪した後、ジュネーブ大学で国際関係を学び、一九二四年に終了証書を得た。それを活かして、「フライデルフイア・レジャー」紙の記者として短期間、国際連盟の活動を取材したこともある。また、アフリカで狩猟もしていたが、「故郷に戻ってオーセイジのことを知ろう」と決めたのはアフリカ旅行中だった。彼は一九二九年にオクラホマに戻り、オクラホマ州ポーハスカから八マイル離れた、樹木の茂る地（彼の割り当て地）に小屋を建てた。後年、健康のために町に移住するまでここで長年、執筆に従事した。彼は一九三四年から四二年まで部族会議の一員に選ばれて、石油の権利が急激に没落する事態に対処するために中心的な役割を果たして、また、一九三五年にはオクラホマ州教育委員会に関与した。その後、一九三八年五月に完成したオーセイジ部族博物館の設立に尽力したが、この博物館は連邦政府の資金によって設立された、インディアン所有の最初のものである。一九四〇年にはメキシコのミチョアカノ郡のパツカロで開催された南北アメリカ大陸インディアン会議に合衆国のインディアン代表として参加した。

彼の先祖のひとり、ハード・ローブはワシントン川の戦いで第七騎兵隊のカスター將軍のスカウトの先頭に立った。

彼が最初の著作に取りかかる契機となったのは二人の人物の存在だった。一人は一八七八年に連邦政府からオーセイジ・インディアンを担当することを命じられたレイバン・J・マイルズであ

る。マイルズはクエーカー教徒であったが、歴史的にインディアンの対するクエーカー教徒の態度は白人としては例外的に真摯である。そのマイルズは担当官として十三年間勤めて退職した時、自分の資料の受取人としてマシューズを選んだ。そこで、オクラホマ大学出版部の創設者であり、編集者であるジョゼフ・ブラントが、マシューズにマイルズの資料を使ってオーセイジの歴史を記すように説得した。こうして出版されたのが『ワタンカ(白人)——オーセイジと白人の道』(一九三二年)である。マシューズはこの書物と集中的に取り組み、数ヶ月で完成し、ブラントの始めた「アメリカ・インディアン文明化シリーズ」の第三巻として出版された。この書物は好評をかくして、販売も順調で五万部売れた。また、「ブック・オブ・ザ・マンズ」賞を受賞した。

一九三四年にマシューズは再度、執筆の求めに応じて、『夕映え』(一九三四)を完成した。これには自伝的要素が含まれるが、四五年に出版された『月に話す』も自伝的である。これはしばしばヘンリー・D・ソロー(一八一七—六二)の『ウォールデン』(一八五四)と、また、ジョン・ミューア(一八三八—一九一四)の『はじめてのシエラの夏』(一九一一)と比較される。次に出版されたのは『油田所有者の生涯と死——E・W・マラーンドの生涯』(一九五一年)である。マラーンドはマシューズの親友であり、一九三〇年代にオクラホマ州の知事であった。この書物の評判はよく、調査が十分にされた客観的な記述とされる。マシューズの最後の著作は『オーセイジ族』であり、出版は

一九六一年である。これはオーセイジ・インディアンの歴史書であり、民族史学^{エスノヒストリー}であるが、多に口承に依拠した、八〇〇ページを超える大部な著作である。未刊であるが、第二の小説『夢のうち』(Within Your Dream)も完成していたとい^う。

II オーセイジ族

スー語系統の言語を使う。彼らの伝承では大昔、オハイオ川の岸から今日のミズリー州の地域に移住した。彼らがヨーロッパ人と初めて会ったのは一六七三年で、場所はオーセイジ川沿いの村であった。一八二五年、彼らは再度移住して、一八五四年にカンザス准州となった地域の最南端に住んだ。彼らはさらに一八七一年にその地を売却して、チェロキー族からインディアン・テリトリ(後のオクラホマ州)に土地を購入した。

オーセイジは五つの村に住んだ。人々は二四の派^{クラン}に分かれていたが、それを大別すると、「空の人々」と「大地の人々」に分かれた。人口は一八七一年の内務省インディアン局の調査では、純血は三六七九名で、混血およびオーセイジと結婚した白人で、かつ、部族で認知された者の合計は二八〇名であった。天然痘などのために一九〇六年に二二二九名となった。内務省は保留地内の東側で、約一〇〇万エーカーの土地を或る掘削会社に一八九五年から十年間、石油と天然ガスを発掘する許可を与えた。そして、一八九六年、オーセイジ保留地で石油が発見された。そのために、

一九〇〇年になるまでにオーセイジ保留地はその資源のために白人から狙われることになった。

重要なことは単独土地所有法の条項で、鉱物資源がオーセイジ族共有とされていることである。部族による土地の共有制を廃止させようとする連邦政府の圧力を撥ね退けて、ポーハスカ、ホミニイ、グレイホースの三か所に共有地をもっている。他に、ポーハスカに部族政府の所有地がある。

鉱物資源から得られる利益は一九〇六年の名簿に名前が記載されている者(または、相続人)にのみ渡ることになっている。大恐慌の時代は石油の価格が下落したが、一九八〇年代初期にはOPECによる石油産出抑制で、オーセイジの石油は再度注目を浴びた。オーセイジ族は一九二〇年代には「世界でいちばん裕福な人々」と言われたが、石油発見は彼らに豊かさだけをもたらしたのではない。後見人に指名された白人がオーセイジを騙し、彼らから財産を奪ったからである。一例として、権利を譲渡させるために二〇名ものオーセイジが殺人事件の犠牲者にされた。また、白人は権利を略奪するために、結婚詐欺を企み、離婚に際して巨額の金銭を要求した。

III 作品の梗概

混血インディアンのジョン・ウインジャーに男の子が生まれる。ジョンはその子が、インディアンの土地や文化・伝統を略奪した

白人たちに挑戦することを願って「チャレンジ（略称、チャル）」と命名する。チャルは父親が読んで聞かせる、英雄崇拜に満ちた本の影響を受けて育つ。父親はジョージ・ゴードン・バイロン（一七八八—一八二四）の『チャイルド・ハロルドの巡礼』（一八一二—一八）やウィリアム・ジェニング・ブライアン（一八六〇—一九二五）の演説に親しんでいる。チャルはインディアンの少年らしく活発に活動するが、家庭の静寂には敬意を払う。夕方、両親は室内で二—三時間も沈黙を守っているほどである。彼の家は貧しい白人の女中を雇うだけの余裕があり、彼は通学学校の生徒となる。オーセイジ・インディアン担当官事務所は時代の流れ（「進歩」）から遠く離れて静かである。純血インディアンと混血インディアンは住みわけている。純血インディアンは割り当て地を拒否するが、混血のチャルの父親は開拓熱にとりつかれている。新しい町の動きを示すものとしては次のようなものがある。銀行、レストラン、教会、電柱、石油採掘のためのやぐら、鉄道など。チャルは町の建設に見入るが、自然環境は急激に変化している。進学したチャルは白人の少年たちと親しくなる。他方、純血インディアンは時代遅れな存在となりつつある。彼は週末を野外で過ごす、それを秘密にする。進歩を信じる混血インディアンは石油の噴出を歓迎するが、石油採掘権から得られる配当金のためにインディアンは真剣に働かなくなる。また、石油の採掘とともに悪質な新来者が年ごとに増える。大学生になったチャルは多弁な白人学生たちの社交辞令にとまどう。彼はキャン

パスのそばを流れる川の近くで、一週間ぶりに自由になるが、もはや裸で自由に泳げない。それでも「文明」を受け入れた彼は後退しない。彼は肌の色を気にし、自分の握手の仕方やお辞儀などに苛立って、逃げ出したい気持ちにもなる。ダンスの最中も、喋らないために、白人学生たちからは奇異に思われる。彼はプロッサムという女性に対して「騎士道」的な思いを抱くが、やがて、大学は新鮮でなくなり、成績も普通である。彼はフットボールもやめる。春が到来する。彼は白人の目を気にするが、彼の中の文明化は進んでいる。その一方で、自然との接触は切れない。空想に浸る。相変わらず、自分の中にある非文明の部分が他人の目につかないことを願う。幼友人のひとは完全にインディアンに戻り、もうひとりとは飲酒に浸る。

彼はダンスが上手であるが、ダンスの相手とは機会があっても話題を見つけれない。それでも彼は後退しない。六月、故郷へ戻る。先に故郷に戻っている幼友人は野心をもたず、人々の乗り物は馬から車へと代わっている。彼にとって父親はもはや英雄ではなくなる。母親は英語で書かれた大学案内書を読んでおり、文明化は浸透しつつある。ブライヤン⁽⁸⁾を崇拜する父親への批判を強める。彼は白人のロスト・ジェネレーション作家と同じく、戦争で英雄になりたいと願い、空軍を希望する。家族所有の放牧場へ出かけて、他人の目を意識しつつも、幼時の遊びを思い出し、コピーテを観察する。草原で、イギリス人で変人とされるグランヴィルに出会う。秋になり、二年生となるが、勉学しない。グラン

ヴィルはスパイという噂もあるが、アメリカが第一次大戦に参戦すると決めると、ブランヴィルは彼のために紹介状を書いてくれる。彼はフラタニティ（男子友愛会）を出ると、四週間の飛行訓練を受けて、合格する。白人の上官がいばるので、反感を抱く。夫の目を盗んで彼を誘い出す白人の女（ルー）が彼の前に現れる。彼は従軍できるといふ夢を抱き、故郷の人々に対する優越感は強まる。夜間飛行訓練隊へ入る。新しい任務として教官となる。月光のもと、空中を飛んでいる彼は眼下の家にいる白人総てに対して優越感を覚える。大西洋沿岸へ移動せよという命令を受けて、ルーと別れる。軍に留まるが、故郷の自然が彼を呼ぶ。新来の白人は石油インディアンの後見人としてオーセイジに群がり、インディアンを騙す。父は白人に殺害される。オクラホマは未だ「文明」の地ではなく、彼は金持ちになる。彼は自動車を購入する。開発のために草の葉は痛み、幼時の場所が石油で汚れている。三日間の飲酒。彼は伝統的なインディアンの踊りを見て、自分は伝統主義者ではないと思ひ、自分が伝統から離れていると自覚する。

IV インディアン男性の成長物語

〈同化政策の積極的受容〉

この作品の特徴は主人公の若い混血インディアン男性が白人の文明に同化しようとする様子を詳細に描写していることにある。また、主人公のチャルが同化政策を積極的に受け入れる舞台とし

て大学が選ばれていることも、他のインディアン作家の作品には見られない特徴である。二十世紀前半に書かれた作品で、インディアンの主人公が文明化政策をチャルほどに積極的に受け入れる作品は他にない。モーニング・ドロー（一八八八？—一九三六）の『混血児コゲウエア——モンタナの大牧場の生活』（一九二七）は女主人公コゲウエアが東部のインディアン学校から故郷の西部に戻ってきて以後の物語である⁹⁾。また、ダーシー・マクニクル（一九〇四—七七）の『包囲されて』（一九三六）では主人公アーチャイルド・レオンはオレゴン州ポートランドで一年ほど働いた経験がある。しかしながら、彼はモンタナ州の保留地に戻ってきて、弟が引き起こした保安官殺害事件に巻き込まれてしまう。そのため、彼は作品の結末部で逮捕されて、その将来は全く不透明となる。作品の標題とおり、彼は「包囲されて」おり、自分の意志を自由に示すことは困難である¹⁰⁾。同じマクニクルの『敵の空より吹く風』（死後出版、一九七八）では冒頭から殺人事件が起きて、白人とインディアンの共存は困難だと示唆されている¹¹⁾。

これらの主人公に比して、チャルは若者らしく積極的に白人の文明に同化しようと努力して、次第にその本質を彼なりに見抜いてゆく。混血であるチャルのこのような積極的な姿勢を純血インディアンに求めることはきわめて困難である。純血派は総じて保守的である。チャルは先祖が被ってきた損害や虐待を知らないわけではないが、彼は彼の生き方を貫徹できる諸条件が整っている。第一に、石油採掘権から得られる配当金が相当にある。第二に、

母親は純血インディアンだが、父親は混血だから、彼には好都合である。さらに、英語の習得に苦勞することもない。また、皮膚の色は白くないとはいえ、容貌は悪くない。そのために彼は有閑階級の既婚女性のルーから誘惑されることもある。

〈故郷批判〉

白人の文明を具体化したものは教育であり、この作品では大学を意味する。チャルは大学教育を白人学生と同じように受け、キャンパス生活を享受する。その結果、大学入学以前から抱いていた故郷と故郷の人々に対する批判は決して緩和されることがない。その批判の矛先は彼の二人の幼友達や母親にも向けられる。

チャルは早くから白人の子供と遊ぶが、ときどきは村の幼友達（サン・オン・ヒズ・ウイングズとランニング・ウルフ）とも会う。しかしながら、チャルはこの二人とは共有するものがないことに気付く。二人は市民の衣服をまとっているが、他の多くの若者と同じように談笑に興じているのがチャルには苛立たしい。二人はフットボールの選手だから、その特技を生かすことができるはずであるが、二人は放課後、小馬に乗って村へ出かけて行くだけである。したがって、この二人の純血インディアンの若者が一度はチャルとともに大学に進学するが、退学後、辿る道はこの時点で予想がつく。すなわち、ランニング・ウルフは重度の飲酒癖におちいり、配当金で購入した高級車で事故を起こして、やがて亡くなる。一方、サン・オン・ヒズ・ウイングズは保守的で凡庸なイン

ディアンに戻って、チャルを落胆させる。二人の幼友達に対するチャルの厳しい批判を表す表現は再三現れるが、その原因は、二人にはチャルのような明確な意思が欠けていることにある。大学という名の文明に触れたチャルには故郷の若者は「何の野心も抱かない」（二六二）つまらない人間と映るのである。

作者の洞察力は鋭く、二人の若者によってインディアン社会が今日も抱える問題を提示したといえる。すなわち、アルコール依存症は今日、インディアン社会の大きな問題であるが、ランニング・ウルフをめぐる挿話はその好例である。また、サン・オン・ヒズ・ウイングズは石油採掘権のために働かなくなる。資本主義は彼には恩恵をもたらすのではなくて、彼には有害そのものであり、無力な若者にしてしまう。人々の収入が莫大のために真剣に労働することを考えず、お喋りに興ずるだけになる。あるいは、人々は突然、何かに取り憑かれたように、市場もないのにニワトリの飼育を始めた（七五）。

チャルの故郷に対する批判は二人の幼友達によって代表されるが、純血インディアンである母親も彼の批判の対象となる。彼は母親が書物を読むのを目にしたことがない（六四―五）。しかしながら、母親は彼が大学に進学すると、大学案内などを読むようになる。これは母親なりの進歩である。ところが、若者のチャルにすれば、母親の進歩は遅い。その一例として、母親の英語は口語風でなく、書物の中の英語のようである。さらに、母親は外出する際、レースつきの上等な青い上着の上にはげばしいインデ

イアンのブランケット（インディアンの上衣）をまとう。母親は新しい白人文明の品である上着を結局は伝統の衣服で被ってしまうわけである。これはチャルが理解に苦しむ習慣である（二六二―六三）。

〈饒舌Ⅱ白人文明の正体〉

この作品の三分の二以上はチャルが大学に進学して以後の物語である。したがって、この作品は混血インディアンの男子学生の物語ともいえるほどに、キャンパスにおける学生の生活が詳しく描かれており、当時の大学生の生を知るのにも役立つ。

しかしながら、この作品をチャルの成長物語として読むとき、彼が白人の文明に同化するうえで大きな問題となるのは「ことば」である。チャルたちを駅に迎えにくれた白人学生たちは新入生たちをフラタニティ（男子学生友愛会）の寮に連れてゆく。そこでチャルが最初に戸惑うのは白人学生たちの社交辞令であるが、これ以後、ことば・話題などが作品のいたるところでチャルの文明化と関連して言及される。

フラタニティとソロリティ（女子学生友愛会）の間では頻繁に交流があり、ダンスパーティーが開催される。チャルはダンスが上手であり、白人の女子学生と幾度も踊る機会がある。ダンスパーティーでの白人学生たちの楽しみは踊りの最中も絶えずお喋りに興ずることである（二一九）。一方、チャルはダンスの最中も話さない。そのために、学生たちには彼の沈黙が奇妙に思える。その

後、彼自身も話題を即座に見つけられないことに苛立ちを覚えるが、解決されないままに歳月が経つ。彼が次に、自然にことばが出てこないのを残念に思うのはスケートに出かけた折である。彼は氷の上で転んだ女子学生を助け上げるが、そのとき、慰めのことばをかけるべきだと知りながらも何も言えない（一四一）。チャル本人のこのような問題とは別に、フラタニティの学生たちの振るまいも彼の、白人文明を積極的に受容しようとする姿勢に影響を与える。プロツサム・ドーベニーが長であるソロリティに招待されているとき、男子学生たちは一座の主役になるうと競う。そのために、チャルは一座の話題が次から次へと移るのを見ていて、学生たちの饒舌ぶりに驚き、圧倒される（一五一）。

彼が適切な話題を見つけて気軽に話せないという苦痛は授業の後にも経験する。教師たちは学生が授業後、教壇にやってきてお喋りしてくれることを期待している。それによって、学生たちが授業を理解したかどうかを判断できるからである。しかしながら、チャルはこういう慣例に気づきながらも、話題とすべきことが見つからずに苦痛を覚える（一四三）。

ことばをめぐる問題は随所で言及されているが、これは大学入学以前にも遡る。チャルが白人の饒舌に驚く様子は早くも第四章で次のように記されている。「川の土手にいる少年たちのひとり は言葉をまるで貨物取扱フレイト人ハンドラーのように用いたので、チャルは、その子が自分は偉いのだと、見せびらかしたいから言葉を用いたのだと思った」（二二六）。

作者は後半を展開するに際して、沈黙・寡黙に耐えられず、饒舌となる白人学生たちと対照的な人物を登場させる。作者はこれによってチャルが白人学生たちの饒舌に苦しめられるのを緩和し、彼が故郷へ戻ってゆく準備を整えているといえる。その人物は熟年者で、イギリス人のグランヴィルである。グランヴィルは大学で教鞭をとっているが、チャルはあるとき、草原で彼と出会う。チャルは日頃から寡黙であるグランヴィルに魅力を感じているが、偶然に会って一段と敬服する。その理由は、グランヴィルがイギリス紳士らしく自然の観察を實踐しており、饒舌なだけの学生たちと対照的な存在であることによる（一七四）。

ことばの問題は政治的にも言及される。チャルの父親ジョンは石油の配当金交渉でワシントンDCに赴き、妻に便りを送ってくる。ジョンはその便りの中で、政府は約束を反故にするらしいと伝えてくる。すると、それを読んだ妻が抱く感想は、白人が歴史的に繰り返ししてきた一方的な条約破棄を思い出させる。「あの人はまるで少年のようだ。いつも政府を信じていた。あそこ、ワシントンには白人しかいないから、白人は舌の先で話し、心を込めて話さない」（一七五）。

〈第一次大戦〉

チャルは父親がバイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』やブライアンの詩文を朗読するのを聞きながら成長する。バイロンはイギリス・ロマン派の詩人であるが、トルコの圧制に苦しむギ

リシアの独立運動を支援してミソロンギで亡くなった。バイロンはイギリス・ロマン派の五人の詩人の中で「英雄的」な亡くなり方をした。また、ブライアンは十九世紀アメリカ社会では人気を博した政治家である。ジョンにとってはどちらの人物も英雄的存在といえる。

チャルはそのような父親の影響を受けており、第一次大戦が勃発すると軍人を英雄視するようになる。彼は合衆国が臨戦体制に入ると、従軍後は負傷兵輸送隊に入隊したいと願う。そして、合衆国が参戦すると、航空部隊の訓練部に入り、順調に昇進する。訓練の試験に合格しないで、白人らしくもなく泣く白人志願兵がいる中でチャルは夜間飛行の教官になる。この地位は彼にはまたとない手段と機会を与えてくれる。キャンパスを後にして訓練場に入ったとき、彼は大学に留まる人々に対していささか軽蔑を覚え、故郷の人々にはなお一層の軽蔑を覚える。彼の従軍によってえられるであろう優越感や英雄崇拜は頂点に達している。さらに、有閑階級の女性ルーはわざわざ海岸のホテルに滞在して彼の訪問を促してくれる。

〈伝統〉

チャルは終戦とともに、ヨーロッパの戦場で本格的に従軍できるといふ夢が挫折して故郷に戻る。しかしながら、彼が文明化が遅れていると繰り返し批判してきた故郷に戻るのには彼の意志に合致していないとはいえない。彼は故郷に戻ることによって、伝統

や文明化の問題を考へる契機を得るからである。すなわち、彼は帰郷後、外の世界からやってきた女性たちと伝統的な踊りを見ることになる。そのうちのひとりには踊りの意義を理解していないことをチャルは発見する。しかしながら、彼はこの時点で自己反省して、自分こそ踊りを理解していないことに気付く(二五三)。

チャルが子供の頃から町の建設に熱心に見入っていたことは第六章に記されている通りである。大工や煉瓦積み職人が二階建ての建物を建て、地面が掘り返される様をつぶさに見る(二二四)。

石油ブームで湧く町ではダンスパーティーのために高級な楽団もやってくる(二四五)。しかしながら、チャルは文明化には時間がかかると自覚する。その後、彼は故郷に戻ることで故郷の人々は文明化が遅いという、自分の性急な批判を修正するようになる。子供の頃から白人文明を積極的に受容してきたことを決して間違いだとは思わないが、同時に、自分自身がオーセイジの伝統を理解していないことにも気付く。

帰郷後、彼は石油の配当金で高級な自動車を購入して、同時代の白人の物質文明に完全に溶け込んでいるが、伝統的な踊りを見ることが、踊りの意義を再認識する。踊りとは「ことば」で表現できないことを身体で表現するものである、と。キャンパスの生活では白人学生の饒舌に圧倒され、苦しめられ、寡黙であった自分に対して劣等感を抱いていた。しかしながら、航空部隊への入隊(すなわち、キャンパス生活との決別)と白人女性ルーとの交渉によって彼は確実に劣等感から解放されてゆく。そして、今、

踊りは彼をさらに解放してくれそうである。

彼は密造酒を入手後、夜間、車を走らさせてカシの小木の密生している地を通りすぎる。彼は車を走らせるだけでは満足できずに、身体に漲る感情を踊りで表現したいと願う。彼は今や、自分がインディアンだと自覚して、カシの小木に向って、自分は風の兄弟だと伝えたいと願う。カシの小木を包む深い沈黙はいつもと違って彼に苦痛を与える(二九七―九八)。

彼はこうして踊りの意義を再認識するが、昔の形式によって自分の感情を総て表現できないことを体験する。まず、彼には車とアルコールが必要であり、このことによって白人文明の浸透は否定できないことが証明される。彼は単純な伝統主義者ではありえない。彼が伝統的な儀式であるスエット・ロッジに入って、その効果・意義を認めることはあるが(二六九)。

〈チャルとインディアン性〉

チャルの成長はまずキャンパスでの生活、次に、航空部隊への入隊、そして最後に、帰郷によって漸次達成される。

彼は大学の入学以前に二人の幼友達を批判的に見ているが、彼自身は週末を野外で過ごすことを秘密にしている(二六八)。野外で過ごすことが白人から「野蠻」と見なされ、文明化していない証拠とされることを充分に意識しているからである。自分の中の「非文明化」の部分に絶対他者(白人)に見られたくないという意識こそ彼の大学生時代の最大の問題である。彼が、自分が未

だ文明化していないと感じる機会は数多くある。その一例はプロッサムと握手する際の下手さである(一一二)。さらに、すでに言及したようにスケートで転んだ女子学生を助け上げても、慰めの言葉が自然には出てこないのも自分の非文明化の証拠だと思う。

彼は早くから白人文明を積極的に受容し、大学生活においても白人学生と同じようになると努力する。しかしながら、彼は自分の意志と努力を裏切るような行動をとってしまう。それは、彼の夢の女性となるプロッサムとのデートの最中に起きる。プロッサムのデートの予定は詰まっている。しかしながら、あるとき、彼女はデートの相手が余所に行ってしまう、予め申し込まれていた別の学生に嘘をついたことになる。それを避けるために彼女はチャルに代役を務めさせる。彼は喜んで彼女と散歩に出かける。しかしながら、彼は夢中な余り、川につながる暗い道を辿りはじめたことに気づかない。彼女はついに「私は川へは行けない」と告げる。ここでも彼は沈黙してしまい、何か彼女を笑わせるような面白い話をしなければと知りながらも、それが見つからない。この場面の意味は「ことば」の問題以外にもある。というのは「川・水」は非文明化(野生)の表象として用いられているからである。

この挿話に先行する、チャルと川の関係を示す箇所がある。彼はある夜、キャンパスでの生活を始めて間もなく、独りになる最初の機会があると、この川の方へ散策に出かける。新しい体験を引き起こしている混乱状態から解放されるのを実感しながら、独

り川の方へ向う。しかしながら、付近に入植している農家がある。彼は泳ぎたくなくなって衣服を脱ぎ始める。しかしながら途中で彼の手の動きが止まる。その理由は他者の視線を気にしたからである。目撃されたら狂人と思われるであろう。自分はもはやオーセイジの山に住む少年ではないのだから、他の人々と同じように振舞うのだと決めるが(一〇三)、この挿話は、彼が文明化とは、ある程度自由を失うことだと自覚する挿話である。彼がプロッサムを散策中に川の方へ誘ったのは全く無意識の行動である。作中において、ある学生(チャック・タルマッジ)が言っているように、プロッサムが安心しておれる男性はチャルだけである(一五五)。したがって、チャレンジが彼女を川の方へ誘ったのは彼女を誘惑するためではなくて、川が彼を引き寄せたのである。一方、彼女にとって川は非文明の表象となっている。

プロッサムに限らず、キャンパスで生活する学生たちがキャンパスを取り囲む自然の方へ積極的に入ってゆくことはない。作中で例外的に描かれているのは学生たちが凍結した池でスケートを楽しむために出かけるときである。

キャンパスが白人文明を体現したところとすれば、チャルは大學生として積極的にそこに入ってゆく。彼は絶えず白人の視線を気にしながら、自分の中の非文明の部分を意識しながら生活する。学生たちの饒舌や社交の浅薄さを見抜きながらも、自分の中のインディアン性を捨て去ることはできない。彼の母親は「インディアン的寡黙」(五四)を守っているが、彼自身も五語以上は話さ

ないと評されるほどである（二三四）。しかしながら、彼は「こ
とば」が重要ではなくて技術が重要な航空部隊に入隊することで
劣等感から解放される。故郷の人々に対する彼の優越感はゆるぎ
のないものであるが、今度は白人に対しても優越感を抱く。「彼
は優越感を抱き、眼下の無数の人々は白人だとずっと思っていた。
自分が、その人々を白人だと思っていることに気づいたとき、彼
はほくそえんだ」（二二二）。こうして彼の劣等感は払拭され、さ
らに、彼が戦時の英雄になれる時期が近づくと、白人女性との交
渉がさらに彼の精神を解放する。しかしながら、その交渉は長く
続かずに、転勤となり、その後終戦となる。彼は自らが遅れてい
ると批判していた故郷に戻ることになる。

故郷に戻ったチャルは余所からやってきて、今では金持ちであ
る男の牧場で若者たちと飲酒騒ぎに興ずる。やがてその場を独り
抜け出す。彼に幼時を思い出させるのはある大きな樹である。彼
はその樹を昔から人間と見なしていたが、昔あるとき、洪水のた
めにその樹の根が露出してしまった。その樹はまるで恐怖のため
に震えているように見えた（二八五）。そこで少年のチャルはそ
の幹に手をおいてやった。すると、その樹は落ち着いた様子だっ
た。今、彼はそんな少年の頃を思い出す。

作品の最後の段階で彼は自然の中に戻ってゆく。彼は大学生に
なっても文明から逃れて自然の中で時を過ごしたいという願望を
絶えず抱いているが、若者としての経験がある程度経てからでな
いと、人間と自然の関係を理解できない。

彼にとって自然界といえは、何よりもカシの小木を意味する。
彼にとつて、オーセイジの谷を取り囲んでいるカシの小木は純血
派のインディアンを連想させ、時代の「進歩」に超然としている
（六七）。

彼は故郷に戻ることで白人の視線から解放され、劣等感からも
解放される。その解放に役立つのが、彼の幼時からの思い出の樹
である。その樹が洪水に襲われて震えているのを慰めた彼はセミ
時雨やカッコウの鳴き声を耳にながら午後の眠気に身を任して自
分が自然の一部であることを再確認する（二八五）。父親が亡く
なったことでバイロンやブライアンは彼にはもはや英雄ではあり
えない。また、彼自身がヨーロッパの戦場で英雄になるという、
白人ロスト・ジェネレーション作家の抱いた夢も彼には無縁とな
る。

V 作品の評価

マシューズの名前は先行する『ワタンカー——オーセイジと白人
の道』によって読書界にすでに知られていた。したがって、この
作品が出版されると、全国紙の「クリスチャン・サイエンス・モ
ニター」（一九三四年十一月八日）に書評が掲載された。それ
によると、マシューズの記述は客観的であり、その描写は優れてい
るということである¹³。次に、「ニューヨーク・タイムズ」紙の書
評（一九三四年十一月二五日）はこの作品を絶賛はしていない。

すなわち、作者は作品の主題を充分に把握していないということである。むしろ、社会や時代を描写したのものとして優れていると評者は述べている⁽¹⁴⁾。

現代の書評としては、作家であり、インディアン文学の研究者であるルイス・オーウェンが高い評価を下している。この作品は一九九〇年代にまでいたる、インディアン作家による小説に方向性を与えたということである。白人はインディアンに「消え行くアメリカ人」という役割を担わせて、悲劇の主人公にしたい。しかしながら、チャルは新しいタイプのインディアンを代表していると、オーウェンは言っている⁽¹⁵⁾。

注

(1) 生年を一八九五年とする書物もある。

Janel Witalec (ed.), *Native North American Literature: Biographical and Critical Information on Native Writers and Orators from the United States and Canada from Historical Times to the Present* (Detroit: Gale Research, 1994) p.409.

(2) 提案者のマサチューセッツ州上院議員ヘンリー・L・ドーズにちなんでドーズ法、または、単独土地所有法と称される。一家の長に一六〇エーカー、一八歳以上の者に八エーカーを与えるというもの。土地の私有化をインディアンに強制して、同化政策を推進する役割をはたした。

(3) セシル・ジョン・ローズ（イギリス生まれの南ア連邦の政治家一八五三—一九〇二）の遺言により彼の遺産を基金として設けられた奨学金で、オックスフォード大学の学生に対して与えられる。対象はイギリス連邦、合衆国、ドイツの出身者。

(4) 一八六八年にカスター將軍が冬季に作戦行動をとって、成功した戦い。
(5) ジョージ・アームストロング・カスター（一八三九—七六）は一八六一年に陸軍士官学校を末席で卒業したが、南北戦争で有名を馳せ、二三歳で史上最年少の將軍となった。六六年に第七騎兵連隊長となり、ダコタとモンタナ準州で対インディアン戦争に従事。七六年に、リトル・ビッグ・ホーンの戦い（一八七六年六月二五—二六日）で部下二六四名とともに全滅した。

(6) John Joseph Mathews, *Sundown* (Norman: University of Oklahoma Press, 1988) 以下、本文中における引用は総てこの書物による。ページ数のみを記す。

(7) 略伝は次の書物による。
Andrew Wiget, *Dictionary of Native American Literature* (New York: Garland, 1992) pp. 245-49.

(8) イリノイ州生れの政治家。一八六〇—一九二五。一八九六年シカゴでの民主党大会で、大統領候補となるが、マッキンレイに敗れる。その後も候補になるが、大統領にはなれなかった。

(9) 喜納育江「混血インディアン女性の自己表象——モーニング・ドープの『コゲウエア、ある混血の物語』」木下卓・笹田直人・外岡尚美編著『多文化主義で読む英米文学——あたらしいイズムによる文学の理解——』（ミネルヴァ書房、一九九九年）

(10) 拙稿「ダーシー・マクニクルの『包囲されて』——混血インディアンの自己探求——」（阪南論集 人文・自然科学編）第三一卷第一号（二〇〇三年）。

(11) 拙稿「草が生い茂り、川が流れる限り——ダーシー・マクニクルの『敵の空より吹く風』を読む」西村頼男・喜納育江編著『ネイティブ・アメリカンの文学』（ミネルヴァ書房、二〇〇二年）。

(12) この中で行われる儀式は精神的および肉体的健康をもたらすものとされている。インディアン諸部族に共通する。

(13) *Native North American Literature*, p.410.

(14) *Ibid.*, p.411.

(15) Louis Owen, (Norman: University of Oklahoma Press, 1992) p. 60.

(二〇〇四年七月二十三日受付)